



TITLE:

本會評議員小竹文夫氏を悼む

AUTHOR(S):

牧田, 諦亮

---

CITATION:

牧田, 諦亮. 本會評議員小竹文夫氏を悼む. 東洋史研究 1962, 21(3): 362-363

ISSUE DATE:

1962-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152611>

RIGHT:

# 彙報

## 本會評議員小竹文夫氏を悼む

小竹文夫博士は昨年七月以來肺癌のため加療中であつたが、同十月十六日午前五時半ついに逝かれた。明治三十三年一月十八日の誕生であるからまだ六十二歳、書庫も新築し、これからは時間にも拘束されることもないといふ今年一月の停年退職を楽しみにしておられたのに、故岡崎文夫博士の舊藏書を主とする漢籍も教育大學の研究室につみあげられたまゝとなつた。先生は大正八年九月上海の東亞同文書院に入學し大正十一年六月卒業、翌七月には母校の助教授を命ぜられた。しかも激務の間に高等學校卒業檢定試験に合格され、大正十四年四月には雄志を抱いて京大文學部支那史學科に入學し矢野仁一、羽田亨教授らについて東洋史學を學ばれたことは、刻苦精勵そのものの先生の平生を示すものであつた。京大卒業後、上海の母校の教授として迎えられ、爾後東亞同文書院大學が大東亞戰爭敗戦後の占領軍による解散指令を受けるまで、約三十年におよぶ上海生活が、その近代中國に

關する歴史的思索の上にも研究業績の上にも、ことに現代中國史の理解の面では内地の研究者では到底及びもつかぬところがあつたことは、世の研究者の齊しく認めるものであつたといつても過言ではなからう。「支那の土地を愛し、支那の人を愛し、支那の酒を愛す」とは先生の常套句であつたが、しかもついにそれに淫するところがなかつたのは、卓見であつた。これは先生の生涯を通じていわゆる「支那通」臭を感じしめるものがなかつたことから知られる。上海生活の後半は、上海事變、支那事變、大東亞戰爭と、兵火の裡に經過し、東亞同文書院の焼失、大村への引揚げ、舊交通大學校舎への移轉、新圖書館藏書の整備など、めまぐるしい變化の最中にあつて、なお「現代支那史」、「近世支那經濟史研究」が公刊されたことは、當時の學界にあつて新生面を拓いたものとして注目された。先生の推挽によつて私は十七年春、助手として東亞同文書院大學に赴任し、翌年九月に應召、敗戦によつて二十年八月十八日に上海に復員し、翌二十一年三月内地引揚げまでの半年餘を先生と生活を共にした。戦勝者らしく意氣揚々と鄭振鐸がわれわれの圖書を接

収にきたこともなおいまにかぶ。昨日に變る敗戦後のきびしい集中營生活の昭和二十一年の正月も體驗した。元旦の讀書始めに先生と武田泰淳と私の三人で、史記の滑稽列傳を讀み、淳子莞の『されば「酒極まれば亂れ、樂しみきわまれば悲し」と言い、人間萬事、このような道理のものです』（小竹文夫・小竹武夫譯史記）の條にいたつて、期せずして貧しい杯を舉げたことは、おそらくは私一生の追懷となるものであらう。引揚げ後、福井師範・金澤大學・東京文理科大學を経て東京教育大學教授に専任されたのは昭和二十八年四月であつた。滯滬三十年の豊富な經驗學識を十二分に活用され、「元史刑法志の研究譯註」は別として、「上海三十年」・「支那の自然と文化」・「中國社會」・「中國の思想問題」・「現代中國革命史」・「中國の人民公社」・「百家爭鳴」など數多くの啓蒙的な著述をされた。このような一連の出版は、先生としては本意ではなかつた。これらの時代の要求にこたえる著者としては、先生を措いて他にはその人を求めがたかつたし、またおそらく、現象の本質を根底的に捉える努力もなく、研究と政治運動とをはきちがえた戦後の中國史研究の一

傾向に對して、止むに止まれぬ先生の信念が  
かくさせたものであらう。先生が自らの停年  
後に期待されたものは實は學位論文となつた  
「清代社會經濟史の基礎研究」をさらに深め  
て、體系的な「中國近世經濟史」を公刊する  
にあつたのである。しかも天は遂に餘日をか  
さず、その素志を果すことなくして逝去され  
たことは學界のためにも痛恨のきわみである  
と言わねばならない。先生の日常には特に奇  
行逸話と稱すべきものはなかつた。先生がか  
つて顧炎武を評された短文（中華六十名家言  
行錄所收）の中に、彼の生涯に奇行逸話とて  
なく、ありとすれば潜邸・曉嵐らをして讃嘆  
せしめた驚くべき學殖を持つたという自體の  
外にないことを記している。「此の奇行なら  
ざる刻苦研鑽が先生の最も大なる奇行であり  
我等の最も銘記すべき逸話なることを痛感す  
る」という一文こそ、そのまま實は小竹先生  
自身の刻苦研鑽の生平を物語るものであらう  
と私は信ずる。

（牧田 諦亮）

## 本會記事

總會 十一月三日（土）京都大學人文科學研  
究所講堂において、第七回總會を開いた。

議事は岩見評議員が司會し、松本評議員を  
議長として進められ、寺田委員より會務報  
告・事業報告・會計報告が行なわれたのち、  
これを承認し、宮崎會長の挨拶があつて會  
を終了した。なお本年は會則により、役員  
改選が行なわれ、次期役員が選出された。  
評議員會 十一月三日、總會に引續いて、同  
所會議室に評議員二十名の參會をえて開か  
れた。また役員選舉終了後、新評議員會を  
開催し、會長・副會長が選出された。なお  
新役員の氏名は、本號の表紙裏面に掲載さ  
れている。

## 學界動靜

### 東洋史談話會

大會 十一月三日（土）於京大人文科學研

### 究所講堂

范氏義莊について

近藤 秀樹

宋初河北路產鹽の禁權されなかつた事情

河原 由郎

日宋貿易と日本商船の海外進出

森 克巳

道教の應報説の展開に關する一試論

秋月 觀暎

桓玄―慧遠の禮敬問題

島田 虔次

アフガニスタンの言語政策とその實情

勝藤 猛

エジプトに於ける近代稅制確立について

中岡 三益

俚獠の文化

松本 信廣

慕容燕の權力構造

谷川 道雄

漢代の詔書と律令との關係

大庭 脩

漢代の里制と唐代の坊制

宮崎 市定

## 史學研究會

大會 十一月二日（金）於京大樂友會館

古代西アジア史研究の現状―T・ヤコブ

セン「古代メソポタミアの政治的發展」

を讀んで― 中原興茂九郎

十二月例會 十二月一日（土）於京大陳列館

### 第二教室

ヘレニズム・ローマ時代のアラブの遺跡

清水 誠

## 京都大學大学院會

例會 十月十二日（金）於研究室

「東洋史研究」二一巻一號合評會

十月二十六日（金）於研究室